

国際麻薬規制 100 年 「世界薬物事犯の情勢」

前国連薬物・犯罪事務所 (UNODC) 事務局長特別顧問

元 UNODC 東アジア太平洋地域センター 代表

元国際麻薬統制委員会 (INCB) 事務局 次長

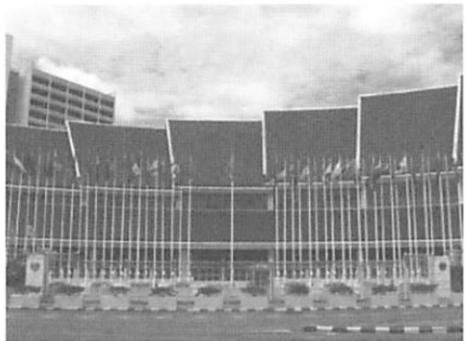
藤野彰



みなさんこんにちは。私は30年振りに日本に帰って参りました。国連に勤務してウィーンに通算25年余り、5年間はタイのバンコクに赴任しておりました。国連では、主として国際薬物規制に関わってきました。今日は、私が世界の様々な国で撮った写真をお見せしながら、スケッチを描くようにして薬物の世界情勢についてお話ししたいきます。



これは「ウィーン国際センター」といい、国連や幾つもの国際機関が入っています。私の最も長く所属した国際麻薬統制委員会 (INCB) 事務局も含む、現在の国連薬物・犯罪事務所 (UNODC) もここにあります。私は、この国連センターに通算25年余り勤務したのでした。



こちらは、タイ、バンコクにある国連ビルです。ここで、私はUNODC 東アジア・太平洋域センター代表を5年間務めました。

麻薬の話

100年の時を超えて

今日の世界薬物状況

さて、今日は3つのテーマに分けてお話ししましょう。最初に、「**麻薬の話**」です。国際的に規制されている、麻薬やその他様々な薬物がどういうものなのか、また何処で作られているのかを、見ていきます。

次に、「**100年の時を超えて**」麻薬の国際規制が始まって100年余りが経ちました。その間にどんなこと

が起こったのか、今日に至るまでにどんな展開があったのかを見ていきます。

最後に、「**今日の世界薬物状況**」、今、世界の薬物状況がどうなっているのか、お話しします。

I. 麻薬の話

まず、最初に「**麻薬の話**」です。ここで、みなさんに質問します。『この中で、麻薬・覚せい剤見たことがある方はいらっしゃいますか』次に『みなさん麻薬とか覚せい剤、規制薬物は悪いものだ、いけないものだと確固たる認識を持っておられる方はいらっしゃいますか』殆どの方が持つていらっしゃるようですね。

実は、麻薬やその他の規制されている薬物が良いのか、悪いのかというのは、造られ方、そして使われ方によるのです。

例えば、モルヒネという麻薬があります。鎮痛剤としては大変重要なものです。免許を持った製薬会社が医療用に造るのは、合法的であり必要不可欠なものです。国際条約にしたがって、医療用麻薬として確保しなければならないわけです。いけないのは、密造され、密輸され、乱用されるものなのです。

ところで、最近の新聞記事で向精神薬と呼ばれる薬物に関して、患者による多量服用や、医師による安易に処方した結果、問題が起こっていることが報道されています。製薬会社が合法的に造った医療用麻薬・向精神薬でも、乱用される可能性があるということには留意しておかねばなりません。医療用には不可欠なものであり、適正な使用を維持していかなければならないということですね。



モルヒネ → ヘロイン

アヘン



〈植物由来の麻薬について〉

アヘン系麻薬

これはアヘンが出来るケシです。このケシ一種類 (*Papaver Somniferum L.*) だけが麻薬を産出します。次の写真にあるのがケシ坊主と呼ばれるものですが、それを切開すると出てくる液があります。これがアヘンです。アヘンは、それ自体でも乱用されますが、その中にモルヒネが10%程度入っています。そのモルヒネに化学変化を加えることによって、ヘロインに変わります。これが世界で最も乱用されている麻薬の一つです。

ヘロインはドイツの製薬会社が初めて製品にしました。非常に効果的な鎮痛剤として製造されたのですが、その後、モルヒネよりも依存性が高く、乱用すれば脳に多大な悪影響を与えるということが判明したのです。

ヘロインはどこで密造されているかといえば、まず伝統的に「黄金の三角地帯」があります。ミャンマー・ラオス・タイの国境が1点に交わる地域です。





コカ系麻薬

■アンデス山脈奥地

これまで、アヘン系（アヘン・モルヒネ・ヘロインに至る）の麻薬についてお話ししてきましたが、次に、コカイン系の麻薬に移ります。コカインってお聞きになったことがありますか。この間、日本でも大量に押収されましたね。コカインが密造されるのは主にアンデス山脈の奥地です。



左の写真にある飛行機で飛んで来ましたが、ここもすでにだいぶ奥地です。武装警官の訓練が行われていました。



その後、このヘリコプターでさらに奥地に行ったのでした。



これはコカの葉です。コカインというものは、コカの葉から抽出した成分に化学変化を加えてできるのです。



このコカの葉を攪拌し、幾つかの化学薬品を加えることによってコカインが精製されます



化学者でなくとも、レシピと必要な化学物質さえあれば、容易に造ることができるのです。



さて、これまで植物由来の、アヘン系とコカ系2種類の麻薬についてお話しして来ましたが、次は大麻についてです。

大麻

■インドネシア、アチエ州

大麻はご存知ですね、マリファナとも呼ばれるものです。

この写真是、インドネシアのアチエ州で撮りました。

アチエ州とインドネシア中央政府との間に平和協定が結ばれた後、しばらくして、政府の要請で我々も訪れました。「代替開発」プログラムを用いて大麻の違法栽培を止め、他の生計を立てる道を確保するのを支援してもらいたいという要請でした。



従って、我々はタイとインドネシアの協力を図ったのです。右の方はタイの王室関係の方で、持続し うる代替開発を促進して業績を上 げている財團の長です。左にいる 方は当時のインドネシア麻薬取締局の長です。真ん中にいるのが私 です。回りによく育った細い葉の 植物が大麻です。

相当な奥地で発見された、大麻の非合法プランテーションでした。上空から飛行機で捜索しても簡単にはわからないよう、大麻はバナナの木々の間に植えてありました。

大麻に対する認識の誤り

ここで一寸、大麻の事例を用いて、薬物規制に関する重要な点に触れておきましょう。近年、大麻が解禁されている国があるとか、大麻はそれほど危険なものではないといった誤解があるようです。

大麻とは、国際条約で医療及び研究用のみに使用出来ると指定された麻薬ですから、それ以外の目的で使えば、各国の法律に触れます。また、いずれの国でも医療・研究用以外に解禁したりすれば、条約違反になるわけです。

私が最初に勤務したのは、「準司法的」な機能をもつ、国際麻薬統制委員会(INCB)の事務局でした。もし国際条約違反の疑義があれば、INCBが調査に入って最終的には当該国に対する制裁措置が予定されています。従って、現在、国の法律で大麻の医療・研究用以外の使用を合法化しているところはないのです。

ここで重要な点は、薬物は、規制されているから危ないのでなく、危ないから規制されているということです。したがって、規制を外せば危険性がなくなるわけではありません。もし、例えば大麻が、医療・研究用以外に使っても問題がない事が検証されれば、規制をはずす手立ても条約上規定されているわけです。

ところが、いわゆる「合法化」を唱える議論の中には、人体・精神への影響を検証するのではなく、例えば「犯罪組織が莫大な不法収益を上げているのであるから、替わりに国が安く販売すればそれを防ぐことが出来るのではないか」というものがあります。これは、先ほどお話ししたことからわかるように、本末転倒の議論です。

そもそも医療以外に使えば人体・精神に悪影響が或る薬物を、それ以外の目的で国家が国民に与えてはならないのであり、また国が規制を緩めれば組織犯罪は直ちに新たな市場を開拓し、新たな買い手を見つけてくるわけです。過去の歴史がそれを証明しています。



〈化学的に合成される薬物について〉

■カンボジア

最後に植物由来ではなく、化学的に合成される薬物についてお話しします。主に向精神薬と呼ばれるものがそうです。麻薬と同様、沢山の種類があります。日本で最も問題になっているのが覚せい剤ですから、それを例に挙げてみました。「アンフェタミン系覚せい剤」と言われるもののひとつです。

これらをつくるためには原料がいります。みんな化学物質です。覚せい剤原料（「前駆物質」とも言われます）としては漢方薬にも使われる「麻黄」から抽出されるエフェドリンが使われることが多いようです。医療用に、咳止めとしてかぜ薬にも入っている場合もあります。

他にも、幾つか「前駆物質」があります。また異なった作用をする化学物質を使って、覚せい剤は合成・密造されます。要するに覚せい剤は、原料さえあれば、どこでも出来るということです。従って、覚せい剤などの原料として国際条約でも規制の対象となっています。国連で私のチームはこの分野での先駆者でした。



この写真は、幾つもの国を経由して「横流し」されるルートの途中で発見、押収された覚せい剤原料です。

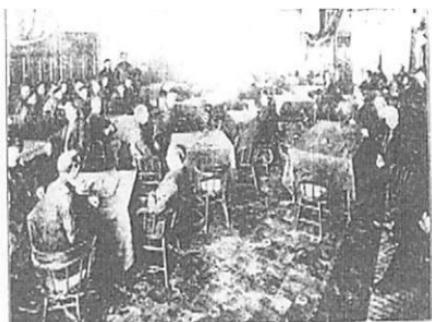
私はいつも質問をするのです。『何故、麻薬や覚せい剤なんか始めたの』と。そうしたら、いつも三つの答えが返ってきます。第一には、『危ないこととは知らなかつた』『薬物がこんなに危ないものだなんて、知らなかつたのだ』と言うのです。第二には、家庭が崩壊し、例えばストリート・チルドレンの様になり、或いは家庭に安らぎがなく、友達しか頼れないのだと。第三に、薬物を使うのはその友達から誘われたのだと語るのです。世界何処の国であろうと、大体この三つの同じ答えが返ってきます。要するに、子ども達・若者がターゲットにされ、その彼らは、規制薬物がいかに危ないものかを知らない。だから知ることは不可欠ですね。したがって、皆様が、いろんな学校でお話しになるということ、これは最も重要なことだと、我々は考えています。子供達が知らなければいけないわけです。

II .100年の時を超えて

さて、次に、国際的な薬物規制が始まって100年が過ぎたことを申し上げましたが、その間どういう展開があったかをさっと眺めたいと思います。

最初、1902年に上海で国際会議が開かれました。初めての麻薬規制に関する国際会議です。日本を含め13ヶ国が参加しました。これが始まりでした。

次の写真は、その上海会議が行われた様子と参加国代表です。



1912年

100年前
万国阿片条約

その後、1912年になって、初めて麻薬規制のための国際条約が締結されました。万国阿片条約です。1912年というのは、タイタニック号が沈んだ年です。

Anti-Opium Poster



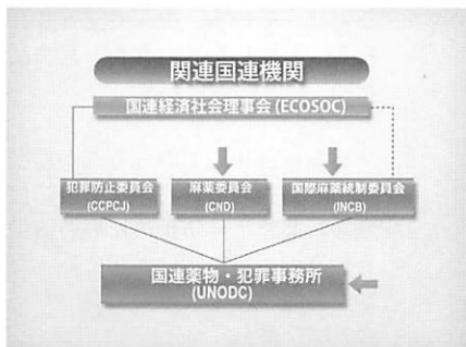
BETWEEN LIFE AND DEATH
Picture shows China smothered by local produced opium and foreign imported narcotics. The man represents China and the bigger man locally produced opium, while the smaller one stands for imported narcotics.

これは、その頃、中国で発行された英字新聞に掲載された、薬物乱用防止ポスターです。

アヘンを乱用していると国が亡びる、と書かれています。あの時代から、薬物乱用防止のための活動というのは、いかに大切であったか、必要不可欠なものであったかが分かります。

1909	上海会議 - 国際阿片委員会
1912	ハーグ: 万国阿片条約
1920-1945	国際連盟 3 条約 (1925, 1931, 1936)
1946 +	国際連合 2 条約 (1948, 1953)
1961	麻薬に関する単一 条約
1971	向精神薬条約
1988	麻薬及び向精神薬の不法取引に関する国連条約

その後、国際連盟時代、また国際連合になってから、様々な国際条約が締結されて、今日に至っているのです。現在の国際薬物規制に関する条約体制は、それまでの条約を集大成した1961年の「麻薬に関する単一 条約」、さらには1971年の「向精神薬条約」、そして1988年の「麻薬及び向精神薬の不法取引に関する国連条約」から成り立っています。



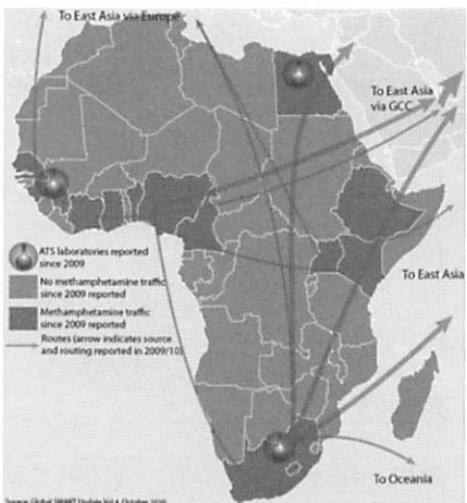
ここで、現在の国際薬物規制に関する、国連の機関について、多少触れておきます。

国連経済社会理事会の「機能委員会」のひとつに、政策決定機関としての「麻薬委員会 (CND)」があります。「準立法機能」を持ち、現在、日本もメンバーです。また、「国際麻薬統制委員会 (INCIB)」は、関連国際条約に依って設立され、「準司法機能」を付与された独立した機関であり、経済社会理事会で選挙されたその委員は個人の資格で行動します。そして、「国連薬物・犯罪事務所 (UNODC)」は、国内で言えば行政政府にあたる機能を果たしているわけです。

法機能」を付与された独立した機関であり、経済社会理事会で選挙されたその委員は個人の資格で行動します。そして、「国連薬物・犯罪事務所 (UNODC)」は、国内で言えば行政政府にあたる機能を果たしているわけです。

III. 今日の世界薬物状況

では、最後に、薬物に関する現在の世界情勢はどういう風になっているかをお話しましょう。今どんなことが起こっているかといいますと、先ほど、例えれば覚せい剤の密造はどこでも起こりうる、と申し上げましたけれど、世界で密造の場所が拡散しているのです。



近年、アフリカの様々な場所で覚せい剤の密造が行われています。まだ、我々は覚せい剤の原料がどこからアフリカへいっているのかも定かに把握できていません。わかっているのは出来たものがしごく高品質だということです。

とすれば、それがどこに密輸されるのか、それは、例えば日本なのです。更に今日の問題は、とくに覚せい剤など、つまり化学的に合成すれば密造できるものは、原料さえ持つていけば、密造出来るということです。従って、どこでも、

密造が起こり得るわけです。

新たな密造の場所が出来れば、そこでも乱用が始まる。そこから新たな密輸ルートが出来る、そしてそのルートに沿ってさらに乱用が始まる。歴史が示してしているとおりです。ということは例えば、日本の若者たちがいろんな国へ行き、どこの国でも覚せい剤なり、あるいは大麻なり、その他の規制された薬物に触れる機会がますます増えてきたことなのです。友達にちょっとやってみよう、これは元気になるなどと言われたら、やってしまうかも知れないのです。私がいろんな国の治療施設などでであった子供達とおなじ運命を辿るかも知れない訳です。薬物乱用の危険性を知ることが如何に必要であるか。だから皆さんにおやりになっていくことが、どんなに重要かということです。

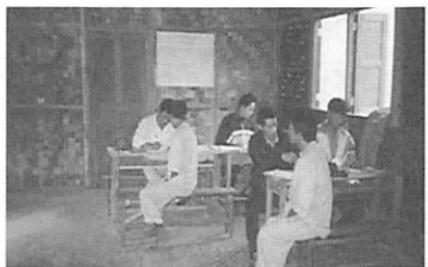
近年



400 held for using drugs in raid on disco

最近、若者の文化が変わって来たといわれています。30年前、私は薬物乱用に関して、日本というのは他の国とは違うのではないかと思っていました。欧米と比べて今そんなことありませんね。欧米のカルチャーと同じことが日本でも起こっている。こういうパーティーで、これ元気になるから、これ気持ち良くなるよ、痩せるよ、などといって、渡されることが多いなって、それを受け入れる素地があるように思われます。

ですから、今なにが必要かといえば、薬物乱用を始めないために、誘われてもそれは「ダメ。ゼッタイ。」と言える子ども達を育てるということですね。友だちから言われても、こういうことになるのだから、例えば脳の中枢神経を直撃することになる、ということ知り、はっきり断ることができる子ども達を育てなければいけないと思います。



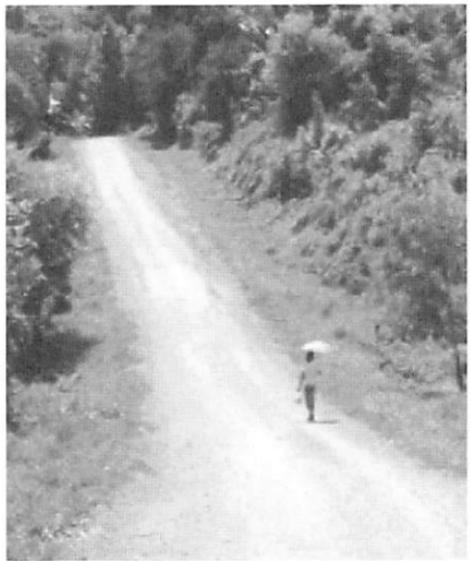
これはいろんな国で薬物乱用防止のための啓蒙活動をしている写真です。

(公財) 麻薬・覚せい剤乱用防止センターが行っている「ダメ。ゼッタイ。」運動の中で、**国連支援募金**というのがあります。その支援金が国連へ拠出され、それから各国でこの様な活動に使われ

ているのです。さまざまな国で子ども達を薬物乱用から救うための地道な活動が続いているのです。

今日、さっと述べてきましたが、なにを申し上げたいかといいますと、まず、世界どこでも、例えば、覚せい剤などいろいろな薬物が密造され、密輸されているという状況があるということです。

それは、日本の子供が薬物にふれる可能性がますます増えているということでもあります。そこでは、子供達は薬物乱用がどんなに危ないものであるか知らなければならぬわけです。



往々にして、私の話はこの写真で終えるのですが、ラオスの奥地にある村で撮影したものです。

われわれが村長達と話している時に、この女性がこの道を辿って行つたのです。この村では、昔ケシを栽培していました。今はそうせずとも生計を建てる道を持っています。あたかも希望へ続く道だという思いを持ったものです。今回は願いをこめて、この写真を最後の写真とします。

世界各地で非常に危ない状況のなかで、必死に生活している人達、また任務に携わっている人達がいます。

乱用薬物の供給を減らすためには、需要を減らさなければいけない。まず、子ども達を助けなければいけない。だから、子ども達が薬物乱用をしないことが地球の反対側の誰かの命を救う、その第一歩につながると思っています。したがって、皆さん、いろんな学校で、お話になるということは、その第一歩を踏み出すことですね。

我々の責任は、いかに正確な情報を伝えするかということであるかと思います。これで、私の話は終了させていただきます。ご静聴ありがとうございました。